

水争いは微妙で真剣だった

里草会顧問 福井 正樹

田植時になると流しの水甕に流れてくる水が途絶えがちになる。この水が止まるたびに私が水を見にやらされる。この水は屋敷の裏手に、私が背伸びして覗ける程度のコンクリートの升があって、そこから竹のサイホンを使って水瓶までひかれている。

うちにとっては重要な飲み水なのだが、この升に来る水は、裏の道路の下に竹のサイホンを通して道の反対側の崖の上に作られたコンクリートの升から引かれている。この升まで水路があって、崖の上の升に入った水のうち、サイホンがのむ量以上の水は、升からあふれて道路の側溝に落ちる。これらの升は、沈砂池でもあった。田植時など水の需要の多い時や渇水期には、この升までの溝も流れが無くなって、その下の砂利の間を流れてきたわずかな伏流水を升が受けとめるだけになってしまう。

この上流には上の家の洗い場が有ったり、汲み取り式の便所のそばを流れていたり、さらに上流は村の中心の川から取水して多くの水田にも配水している。村の中心の川の上流には多くの山田があり、その上流には牛の放牧場もあり、更に深い山の中を流れ下ってくる谷川だ。「谷川の水は3尺流れたら澄む」と言われるが、砂混じりの清流は足でかき回してもほとんど濁らない。うちの水は普段はきれいに澄んでいるが、山田などの代掻きをしている時には、わずかに濁っている時もある。暑い時などこの水を直接飲むこともあるし、祖父は「寒の水を朝一杯呑め」と言って真冬の水を飲んでいて、ただ普段はいつでもやかに沸かしたお茶があるので、生水を飲むことは少なかった。

あて流しなので、いつもちょろちょろ音をたてて流れている。そして屋敷のコンクリートの升からはもう一軒にも流れていて、こちらはさらにうちの屋敷を通り土手の下を通過して下の家に竹筒で続いている。

升にはこの二つの家に同じように水が出てゆくように、同じ高さに穴が設けてあるのだが、下の家はさらに小さな竹の樋で升到ちる水を受けて、自分の穴に落ちるように仕掛けがしてあった。この樋が升到ちる水を全部取ってしまうとうちに来る水が止まる。水が止まるたびに私が行かされて、この樋を少しずらしてくる。溢れるほど来ている時は問題ないのだが、村の皆が水を使うときには申し訳程度にしか流れてこない。

私が下の家に行く樋をずらすと下の家から来て樋を戻す。毎日何度もこれを繰り返していると腹が立ってきて、ある時この樋をへし折ってしまった。下のうちのおばあさんが大声で祖父に言いつのり、祖父は竹を割って樋を作ってやっていた。私はひどいことをしてしまったわけなので、てっきり叱り飛ばされると思って隠れていたが、祖父は何にも言わなかった。水争いとは、こういうものなのだと祖父も身に染みているからなのだろうか。

田植時の村の常会に、祖父は村の役を引いたのを機会に、叔父を出すようにしていた。しかし会議の様子が心配なので叔父の帰ってくるのを待っているのだが、一向に帰ってこない。やっと遅く帰ってきたので聞くと、自分の田への水を引くように細工をしようと思

っているので、誰も無駄話をしていても帰らないのだそうだ。相当上流から分かれ分かれて水を田に引いているのだが、その別れる部分をちょっといじって自分の田に入るのを増やす。五分五分の所を四分六にする程度だ。我田引水とはいえ、相手の水を止めたら喧嘩になる。わかるかどうかの水流の変化をもたらす。小石ひとつ相手の水路に入れるとか、自分の水路をひと鍬掘り下げるとか、分かるか分からないか程度の微妙な許容範囲での争いなのである。強引なことをすればたちまちひどいことをされたうわさが流れて、気まづくなる。それに上流でやれば、下流の皆の田に影響するし、その水系の田を持つみんなの非難を浴びることになる。

しかし水田農耕にとっては、水は絶対的な生産要件である。田植時によく雨が降って田んぼにふんだんに貯まる年もあるが、引いてくる水だけではなかなか畦を塗るための水さえ遅々として廻ってこない年もある。田植えがすんでからも日照りが続くと、水の便の悪い田や水持ちの良くない田は干上がってゆき、ひび割れが広がり、更に白く乾燥して稲が枯れてくる。耕作者にとっては、稲が死んでゆくのをなすすべもなく見守るのは耐えられないものである。

水田農耕の世界は、どうしても水が納得のいく形で配分されなければならない。それを支配するのは個人の方ではなく村の合意なのだ。そのために神社を建てて神の力を借りたり、みんなで誓あい守りあいして水を分けてきた。隣の村との水争いがある、ここに立てこもって喧嘩したのだというような話を子供の頃聞いた。いまでは大岡越前の守が裁いたという史跡の札が立っている。こんな小さな村同士でさえ水争いがあったのだから、延々と昔から水を巡る争いは続いていた。守護や大名など、時の支配者はいかにこれらの争いを不満のないように治めるか、苦労したことであろう。

私が現在地に住み始めた1960年代には、新田という村の寄留者として扱われていた。駅に近いので市営住宅などもあり、農耕に関係ない人も居るが、春には水路の清掃に駆り出された。原則として各戸男性が一人出る決まりで、人を雇ってでも労力を出すことになっていた。

この新田地区は、江戸時代の藤堂藩が新田を開削し、安定した農耕生活ができるまで相当苦労した経緯が記録されている。古墳がたくさん築かれて古くから人は住んでいたのだろうが、水利が悪くて水田はなかった。その荒野に水を引いてくるため、夜間に提灯を点けて高低差を見定め水路の開削をしていったのだという。

そのため水は厳格に管理され、水役に当る人は権限も大きくてみんなから信頼される人が選ばれていた。水を盗んだものは村八分にするとともに、近所の人から制裁のためその家に押し入り、鍋やかまども壊すという掟があった。村八分というのは、火事と葬式のみ協力して対応するが、その他の交際は一切行わない。火事は消さないと周辺にも被害が出るし、死者も土葬しないと悪性の病気なら伝染もするからだ。私が住むようになってからも水を盗んだことが発覚して、実際に制裁を行ったため、人権侵害だというような新聞記事があった。人の田に穴をあけて自分の田に水を落とすのである。そんな道具もあった。